

子宮がん検診

■検診を指導した先生

伊藤良彌

東京都予防医学協会婦人検診部長

鈴木昭太郎

元川崎市立井田病院

曾 莉茜

日本医科大学第二病院

塚崎克己

慶応義塾大学医学部准教授

長谷川壽彦

東京都予防医学協会検査研究センター長

日景初枝

慈生会病院

宮下謙之助

元河北病院

(協力医療機関)

慶應義塾大学医学部産婦人科教室

東京慈恵会医科大学産婦人科

東京女子医科大学産婦人科教室

順天堂大学医学部産婦人科

日本医科大学第二病院産婦人科

■検診の対象およびシステム

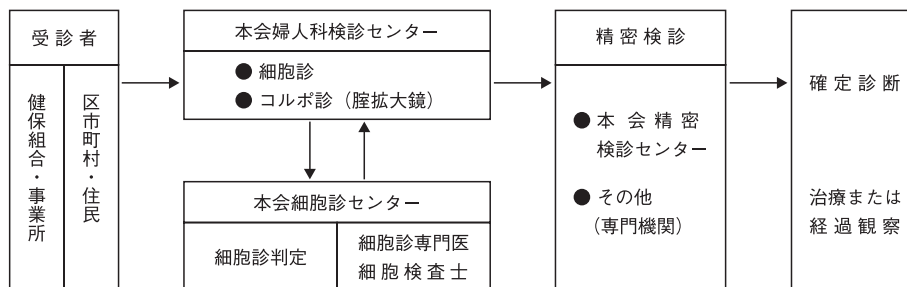
東京都予防医学協会(以下「本会」)では、本会保健会館クリニックにおいて健康保険組合や事業所および地域住民を対象とした来館方式での子宮頸がんの施設検診(本会婦人科検診センター「グリーンルーム」)を1973(昭和48)年に開始した。

1次検診として、細胞診、コルポ診、内診を実施、細胞診は本会の細胞診センターにて細胞検査士・細胞診専門医の有資格者が判定している。異常所見を有する受診者は、2次(精密検診)として本会の精密検診センターあるいは受診者自身の住所の関係で、その他の専門機関を受診して、確定診断の上、治療あるいは経過観察となる。

初年度の受診者は65人と少数であったが、その後受診者は増加して、2002(平成14)年度には受診者が1万人を突破した。2008年度には16,963人が受診し、順調に増加傾向を示しており、15例の上皮内癌以上のがんを発見した。

検診開始以来では、延べ231,727人に検診を実施し、197人の上皮内癌以上のがんを発見、0.09%の発見率であった。

検診システム



子宮がん検診（グリーンルーム）の実施成績

伊藤 良 彌

東京都予防医学協会婦人検診部長

2008年度の検診成績

本年度の職域（健康保険組合・事業所）と地域の合計の受診者数は16,963人である。表1に2008（平成20）年度の職域および地域の受診者の年齢別クラス分類を示す。職域検査数は13,219人で前年より232人増であり、地域検査数は3,744人で、前年より982人増であった。

職域においては40歳代の受診率が最も高く28.9%、次いで30歳代の28.7%と僅差で前年度と逆転したが、50歳代は23.0%、20歳代は10.4%、60歳代以上は8.9%で前年とおりの順である。

地域の受診率では40歳代が30.0%で最も多く、それに次いで60歳代が21.3%。50歳以上が21.2%とこれもまた僅差で逆転し、次いで30歳代が16.5%、20歳

代は3.8%と低率であった。

職域において60歳以上の受診者が地域に比べ著しく低いのは定年退職制度が大きな原因と思われる。また、2004年度より厚労省の指針で子宮頸がん検診対象年齢が20歳以上に引き下げられたが、20歳代の実数は職域で前年より68人増加し、地域では35人増加している。また、要精検となるクラスⅢa以上の検出率においては、職域の受診者13,219人中251人、1.9%に対して、地域検診の受診者3,744人中58人、1.5%であり、前年度と同程度の率であった。

表2に検診を開始した1973（昭和48）年から2008年までの年度別クラス分類を示す。36年間で延べ231,727人を対象とした子宮頸がん検診を実施したが、正常範囲であるクラスⅠ、Ⅱは229,059人で98.9%で

表1 年齢階級別・子宮頸がん検診成績

(職域)			(2008年度)										
class	検査数	%	～24歳	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70歳～
I	775	5.86	29	67	107	138	137	118	81	38	39	16	5
II	12,193	92.24	371	866	1,486	1,960	1,876	1,625	1,511	1,381	843	213	61
III a	233	1.76	11	33	54	41	35	29	17	7	4	2	
III b	14	0.11	1	4		2	2	1	1	2	1		
IV	4	0.03		1		1	2						
V	0	0.00											
計	13,219		412	971	1,647	2,142	2,052	1,773	1,610	1,428	887	231	66
%			3.1	7.3	12.5	16.2	15.5	13.4	12.2	10.8	6.7	1.7	0.5

(地域)			(2008年度)										
class	検査数	%	～24歳	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70歳～
I	250	6.68	4	6	28	28	44	42	26	16	23	20	13
II	3,436	91.77	22	109	283	261	597	413	401	343	428	322	257
III a	52	1.39	1	2	10	5	17	7	2	3	3		2
III b	4	0.11					2		1			1	
IV	2	0.05					1					1	
V	0	0.00											
計	3,744		27	117	321	294	661	462	430	362	454	344	272
%			0.7	3.1	8.6	7.9	17.7	12.3	11.5	9.7	12.1	9.2	7.3

あり、以下クラスⅢa 2,303人(0.99%)、クラスⅢb 243人(0.10%)、クラスⅣ 96人(0.04%)、クラスⅤ 26人(0.01%)であった。

累計と2008年単年度を対比すると、正常範囲のクラスⅠ、Ⅱにおいては累計が98.9%、単年度が98.2%でほぼ同率であった。クラスⅢaは単年度が1.7%と累計の1.0%よりやや多いのはHPV(ヒトパピローマウイルス)感染をⅢaに組み入れているためと思われる。クラスⅢbとⅣ、Ⅴは累計とほぼ同率であった。クラスⅣ、Ⅴの本年度の数はいずれも6と0であった。

表3に年度別の追跡結果(病理診断)を示す。1973年度から1997年度までは追跡率は90%から75%

に徐々に下降し、1998年度より66%前後になった。2008年度は61.2%とやや低い。2009年10月30日現在追跡中であり今後追跡率が少しは向上すると思われる。ここ数年は追跡率は横這いであるが、追跡率の向上は今後個人情報保護法の影響でますます困難な方向にあると思われる。

なお本会では、子宮がんをはじめ各種がんの追跡調査に力を入れるため、精度管理委員会を設置している。精密調査結果の把握率が検診機関の選別に重要な評価の対象となる動向にある。

2008年度の上皮内癌以上の発見がんは15例で受診者16,963人に対し発見率は0.09%となるが、これは追

表2 子宮頸がん検診・年度別・class分類

(1973~2008年度)							
class	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲa	Ⅲb	Ⅳ	Ⅴ	計
年度							
1973~1977	3,688	814	16	5	4	2	4,529
1978~1982	16,410	1,727	51	16	6	2	18,212
1983~1987	18,465	4,979	168	19	5	2	23,638
1988~1992	20,151	8,245	155	22	14	2	28,589
1993~1997	18,190	15,928	238	29	17	6	34,408
1998~2002	12,164	26,828	428	53	19	5	39,497
2003	3,131	8,198	136	15	7	5	11,492
2004	2,994	8,457	168	13	7	0	11,639
2005	3,182	9,905	197	15	5	1	13,305
2006	2,250	11,197	239	17	3	0	13,706
2007	965	14,537	222	21	3	1	15,749
2008	1,025	15,629	285	18	6	0	16,963
%	6.04	92.14	1.68	0.11	0.04	0.00	100
計	102,615	126,444	2,303	243	96	26	231,727
%	44.28	54.57	0.99	0.10	0.04	0.01	100

表3 子宮頸がん検診・年度別・病理組織診断

(1973~2008年度)													
組織診断年度	良 性	軽中等度異形成	高 度異形成	上皮内癌	微小浸潤癌	浸潤癌	腺 癌		その他のがん	その他	精検受診者数	精検対象者数	追跡率
							頸 部	体 部					
1973~1977	10	4	5	1	2	2	1	0			25	27	92.6
1978~1982	26	10	10	6	6	4	0	1	転移 1 部位不明 1		65	75	86.7
1983~1987	44	76	8	11	2	3	0	0			144	194	74.2
1988~1992	63	47	19	17	9	4	0	0			159	193	82.4
1993~1997	91	70	30	8	14	5	2	0	腺扁平 1		223	290	76.9
1998~2002	167	115	24	19	12	4	2	1			345	505	68.3
2003	41	36	9	5	1	1	1	2	部位不明 1		100	163	61.3
2004	54	55	8	7	0	0	0	0			125	188	66.5
2005	72	51	13	8	1	0	0	0	部位不明 1		147	218	67.4
2006	98	55	13	4	2	0	0	1			173	259	66.8
2007	68	72	17	5	0	2	0	0			165	247	66.8
2008	101	60	13	8	1	2	2	2			189	309	61.2
計	835	651	169	99	50	27	8	7	5	9	1,860	2,668	69.7
%	44.9	35.0	9.1	5.3	2.7	1.5	0.4	0.4	0.3	0.5			

注 追跡結果は2009年8月現在。

跡率61.2%の段階での発見率であり、追跡率が上がれば発見率もやや高率になると推測される。

累計においては延べ精検対象者数2,668人中実際に受診が確認された人は1,860人(69.7%)であった。内訳は軽・中等度異形成651例(35.0%)、高度異形成169例(9.1%)、上皮内癌99例(5.3%)、微小浸潤癌50例(2.7%)、浸潤癌27例(1.5%)腺癌、その他の癌20例(1.1%)という結果で、延べ受診者231,727人中上皮内癌を含めたがん発見数は196人(がん発見率0.08%)であり、このうち76.0%が早期がん(上皮内癌、微小浸潤癌)であった。

表4と図に要精検率、がん発見率および異形成発見率の年次推移を示す。がん発見率は検診を開始した1973年度より現在まで多少の変化はあるものの0.1%より徐々に下降して、2007年度は0.04%になったが、2008年度は0.09%に上昇した。一方要精検率は2008年度は1.8%と若干上昇した。異形成発見率は年ごとに高率傾向を示し、2007年度の異形成発見率は0.5%になっていたが2008年度は0.4%である。特に細胞診でクラスⅢaと判定され、病理診断で異形成となった症例の増加が著明で、これはHPV感染の症例が多数占めている。しかし、HPV感染例でも消退例も多く、精密検査をしないで経過観察でも良い例が含まれている。

クラスⅢaは一部の職域や地区の検診によっては精

密検査をしてその費用までも負担をするというワンパター的なしぼりがあるが、本会受診でのⅢaはほとんどそれにあたり、そのことは精検受診率上昇と異形成発見数増加には役立つが、異形成発見率の上昇にはつながりにくいという結果になっている。

現在、子宮頸がんの細胞診分類は従来の日母のクラス分類を廃してベセスダシステム準拠の新分類に移行期間中であるが、統計的処理の変更のこともあり、従来のクラス分類を使用している施設が大部分である。

新分類では不適正標本で判定不能による再検査の費用負担の問題や、耳慣れないASC-US、ASC-Hの周知など、なお時間がかかりそうである。

表4 要精検率・発見率(がん・異形成)年次推移

(1973~2008年度)			
年 度	要精検率	がん発見率	異形成発見率
1973~1977	0.596	0.132	0.199
1978~1982	0.412	0.104	0.110
1983~1987	0.821	0.068	0.355
1988~1992	0.675	0.105	0.231
1993~1997	0.843	0.087	0.291
1998~2002	1.279	0.096	0.352
2003	1.418	0.096	0.392
2004	1.615	0.060	0.541
2005	1.638	0.075	0.481
2006	1.890	0.051	0.496
2007	1.568	0.044	0.565
2008	1.822	0.088	0.430

図 要精検率・発見率(がん・異形成)年次推移

